

総合型地域スポーツクラブのエリア及びクラブマネジメント

——子どもの意識調査から——

折本 浩一・曾根 幹子¹⁾

A Study of the Area Resources and Management of Community Sports Clubs:
From the Investigation of Children's Consciousness

Koichi ORIMOTO and Mikiko SONE¹⁾

I. はじめに

ますます進む我が国の少子高齢化社会の中で、人々が地域のスポーツ施設を拠点として子どもから高齢者に至るまでの誰もがスポーツに参加でき、また複数のスポーツ種目に親しむことができるようなスポーツクラブを育成することを趣旨として、文部省（現文部科学省）は平成7年に「総合型地域スポーツクラブ育成事業」をスタートした。平成12年には同省によって「スポーツ振興基本計画」が策定され、総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）育成の到達目標として「2010年までに全国の各市町村において少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを設立する」ことが示された。その結果、文部科学省の調査では現在創設準備中も含めると全国で2,905クラブが育成されている（2009年7月1日現在）。

このような中、筆者らの調査²⁾では総合型クラブの会員として「最も多い年齢層」に「子ども（18歳まで）」をあげたクラブが44.9%と最多であった。同じく筆者らの調査³⁾では、スポーツ系NPO団体が掲げているミッションとして3番目に多かったのが「子どもの健全育成」であった。これらのことを鑑みると地域の人々にとっては、いかに子どもの健全育成を図っていくかが大きな問題・課題の一つになっており、スポーツ団体を立ち上げるきっかけになっているのではないかと考える。

子どもたちの健全育成を考える上では、単にスポーツ実践等による体力の向上のみならず、子どもの居場所をスポーツという「場」でどのように担保してやれるのかに関しても考えていく必要があるだろう。明石（2004）は「平成の子どもたちは教室での一人ぼっち化、社会の中の孤立化、さらにストレスを抱えたり、不登校になったりなど様々な問題が起きている」ことを指摘し、鳥越（2008）は兵庫県相生市の住民交流事業でできたコミュニティなどを例にあげ「いろいろな

1) 広島市立大学, Hiroshima City University

2) 本調査は2003年12月31日までに設立された全国の総合型クラブの内、設立3年以上経過した470クラブを対象に実施した（兵庫県を除く）ものである。標本数444, 回収数267, 回答率60.1%, 有効回答数254。

3) スポーツ系NPO団体のミッションに関するデータは、当時のNPO法人クラブネッツ（2005）の全国スポーツNPOに関する調査データをもとにし、健康・スポーツ系NPO法人の認証・申請団体（1,713）を対象に、ミッションで掲げている内容をキーワードにそってカウントしたものである（領域が多岐にわたる場合は複数カウントとした）。最も多かったのは「スポーツの普及」（24.4%）、2番目は「地域社会の交流・活性化」（16.4%）、3番目が「子どもの健全育成」（15.4%）であった。

学年の子どもたちが混じっている場所で、遊んだり、楽しんだり、悔しい思いを経験することが、自分がへこたれない力をつけることになる」として、地域における子どもの「居場所」提供の重要性を述べている。まさに総合型クラブは、多種目、多世代、多機能など標榜する中で、子どもたちがスポーツに関わる場として、また地域の大人との交流や関係が深められる「居場所」として、地域の中で機能していくことがますます重要になってくるだろう。

本研究では、子どもたちにとって魅力的な総合型クラブは主にクラブのエリアマネジメント及びクラブマネジメンが重要なポイントになるのではないかと考えることから、その在り方を探るため、上述したマネジメントの視点から調査・分析することを目的にした。

Ⅱ. 方 法

1. 調査方法と対象

本研究は、質問紙調査票を用いたアンケート調査を2008年8月中旬に実施した。対象は、広島県広島市のAスポーツクラブの小・中学生及び広島県山県郡のBスポーツクラブの小・中学生である。両クラブは、スポーツ少年団を母体として設立したクラブであり、設立から今日に至るまで活発に活動が行われている。

Aスポーツクラブは、広島県広島市の都市部郊外のベッドタウンにあり、車で15分ほどの地理的距離にある。平成19年6月16日に設立され、会員数は490人（平成20年7月1日現在）であり、活動種目はバレーボール、剣道、ソフトボールの3種目を展開しており、登録指導者数は15名である。本クラブは、地域の子どものから高齢者までが、スポーツ・レクリエーション活動及び文化活動に親しむことにより、地域社会との連携・親睦を図りながら、健康で明るい町づくり実現に資することを目的として設立された。クラブで行われるイベントとしては、JTサンダーズのバレーボール教室や、新春ロードレース、町民運動会、種目交流大会などがある。クラブの定期的な会費は、この地区の既存スポーツ団体の支えによって運営されているため徴収していないが、不定期な競技種目ごとの教室や大会運営の活動費は徴収している。このクラブの特色は青少年健全育成に重点を置いている点にある。クラブ運営者の話では「最近はおままな子が多い」ため、スポーツをする中에서도ただ練習を教えるだけでなく、「挨拶をしっかりとする」などの礼儀や団体行動を意識的に教えているということだ。子どものクラブ会員は、地域の少年スポーツクラブから総合型クラブへ移行した者が多い。

Bクラブは、広島県山県郡にあり、少子高齢化の進む山間地域にある。平成15年3月9日に設立され、会員数は、431人（平成20年7月1日現在）である。活動種目は、幼児体操、フットサル、剣道、卓球、ジョギング、ビーチボールバレー、硬式・ソフトテニス、ソフトボール Jr. スポーツ吹き矢、健康倶楽部など17種目を展開している。登録指導者数は50人（有資格者10人）である。設立経過としては、スポーツ施設の町外の利用者が多い現状を、町内利用者増に改善したいという思いから、行政関係者の地域住民への熱心な説明・説得から総合型クラブへの取り組みを開始した。複数スポーツ種目が実施できるように会場をセットし、参加者が自由に選んでスポーツを楽しむ方式をとりいれている。クラブで実施する独自のイベントには、4時間をチームにより自転車走り続けるママチャリレース、50mのそうめん流しやお祭りなど、様々な種類のものがある。会費は年間で大人が7,000円、子どもが5,000円となっている。クラブの特性としては、他の総合型クラブの良い点を積極的に取り入れて、例えばスケジュールやクラブの様子の写真など

をカレンダーに載せて配布し、地区の人がクラブに注目するよう工夫している。また、スポーツ以外にも文化的な活動を取り入れ、多くの住民が幅広く楽しむことのできる空間を作っている。さらに、イベントに参加した子どもたち自身がバザーの手伝いをしたり、体育館の整理をしたり、子どもが主役になって活動する機会なども意識的につくっている。

調査は各クラブの代表者に配布、回収をお願いした。夏休み期間中だったこともあり、教室に参加していない子どももいた関係で、クラブ会員の子どもたち全員に配布する事ができなかった。Aクラブでは子ども会員240名中50名に配布し、回収率は66%であった。Bクラブは子ども会員147名中100名に配布し、回収率は54%だった。両クラブの平均回収率は60%で、有効回答率は97.7%であった。

2. 調査内容

調査内容は、①施設・イベントに関すること（「施設は使いやすいと感じるか」「トイレは綺麗だと感じるか」「自動販売機が置いてあるか」など）15項目。②指導者・友人・家族・自分に関すること（「クラブで友達ができた」「クラブで上級生と良く話をする」「クラブの大人たちともっと関わりたい」「コーチは良く褒めてくれる」など）30項目。③クラブの会費・スポーツにかかるお金に関すること（「家族はクラブの会費が安いと思っている」「スポーツ用品を買うのにお金がかかる」「会費にあう運動・活動ができている」など）13項目。④基本的属性に関して（「学年」「週に何回クラブを利用しているか」「クラブに入った理由」など）10項目。計68項目の質問紙を作成し、2名の子どもに対しプレテストを実施し、確認後に正調査を実施した。

3. 分析

データ分析は単純集計を行った。また施設、人、会費等に関する項目は、これらの背景にある潜在的な要素をさらに導きだして説明するためにSPSS分析ソフト14.0Jを利用し、因子分析を行った。

Ⅲ. 結果と考察

表1は、回答者を学年男女別に表したものである。クラブの事務局に配布をお願いした関係で夏休み期間中、教室等に参加した子ども会員のみの回答となったため、学年別や男女別の配布がとれなかった。結果的に学年別男女の回答数は、小6男子27.0%以外ほとんど大差なかった。

表1 学年別男女の回答者数 (%)

学 年	男 子	女 子
小3	0.0	2.4
小4	3.5	4.7
小5	5.9	4.7
小6	27.0	5.9
中1	9.4	7.1
中2	9.4	7.1
中3	9.4	3.5

n=85

2. クラブの利用頻度

表2は、子どもたちがクラブを利用する頻度を表したものである。回答の回数ごとに合計した多い順に「週1回」24.6%、「週2回」21.3%、「週3回」16.6%、「毎日」14.1%、「週5回」13.0%となっている。小学生では利用頻度が週の半分とそれ以下であるが、中学生では「ほぼ毎日」クラブ活動をしている子どもと、「週1回」「週2回」程度実施している子どもに分かれる。

クラブの利用日数は定められていないので、子どもたちが利用したいときに自由に参加できているが、「毎日」や「週5回」など、クラブを頻繁に利用する子どもがいる一方で、「月1回」とほとんど利用していない子どももいる。平成14年から完全学校週五日制が始まり、子どもたちの自由時間が増えた。クラブは、子どもたちが自由時間をクラブで過ごすために、子どもたちを引きつける快適な「居場所」を提供できるような努力が必要であろう。

表2 クラブを利用する頻度 (%)

学 年	毎 日	週5回	週4回	週3回	週2回	週1回	月1回
小3	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0
小4	0.0	2.4	1.2	4.7	0.0	0.0	0.0
小5	0.0	1.2	1.2	1.2	2.4	4.7	0.0
小6	0.0	5.9	5.9	5.9	11.8	3.5	0.0
中1	4.7	3.5	0.0	0.0	0.0	7.1	1.2
中2	4.7	0.0	0.0	1.2	4.7	5.9	0.0
中3	4.7	0.0	0.0	1.2	2.4	3.5	1.2

n=85

3. クラブ加入年数

表3は、子どもたちのクラブ加入年数である。小3は「1年以内」2.4%で、これから活動を積み重ねて行く段階にある。クラブの会員として、小3あたりから加入して生涯を通してスポーツを実施することが望ましいと考える。中3になると高校受験を控えて、クラブを退会する者が多くなるのは、やむをえないことであろうか。

表3 クラブへ加入している年数 (%)

学 年	1年以内	2～3年	4～5年
小3	2.4	0.0	0.0
小4	2.4	1.2	4.7
小5	3.5	2.4	4.7
小6	1.2	15.3	16.5
中1	9.4	2.4	4.7
中2	0.0	4.7	11.8
中3	1.2	7.1	4.7

n=85

4. クラブに入会した動機

表4は、「子どもたちがクラブに入った動機」を学年ごとに示したものである。「運動が好きだから」がほとんどの学年で多く、また、「家族に勧められて」「友達に勧められて」が次に多い。家族が勧めているということは、家族にとっても子どもを安心して預けることのできる地域のクラブであるといえよう。友達が勧めているということは、それ自体、クラブに魅力があるということを示している。

表4 学年別クラブ加入の動機 (%)

学 年	健康の為	運動が好き	時間に余裕	家族の勧め	友達の勧め	医者勧め
小3	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0
小4	0.0	2.4	0.0	5.9	0.0	0.0
小5	0.0	9.4	0.0	1.2	0.0	0.0
小6	0.0	18.8	0.0	11.8	2.4	0.0
中1	1.2	12.9	1.2	0.0	1.2	0.0
中2	0.0	10.6	1.2	2.4	2.4	0.0
中3	1.2	5.9	0.0	2.4	3.5	0.0

n=85

近年は運動やスポーツに興味を持って積極的に活動する子どもと、そうでない者に二極化されつつある傾向がみえる。クラブに参加する子どもは運動が好きだから参加したという理由が多かったが、総合型スポーツクラブでは、ただスポーツをするだけでなく、バザーなどのイベント活動や文化的活動も視野に入れており、そこにスポーツがあまり好きでない子どもでも参加できる要素がある。また子どものうちから「健康のため」と考えていることは、現代の子ども健康状態や健康観があらわれていて興味深い。今後指導者は、クラブ参加の動機にそのような考えが含まれていることを踏まえたプログラムサービスを行っていくことも必要であろう。「医者勧め」で参加した子どもはいなかったが、今後はそういう子どもも参加してくる可能性も大いにあると思われる。

5. クラブ継続の意志

表5は、子どもたちが、これからもクラブを続けていきたいかについて示したものである。96.5%が「継続する」と答えている。「継続しない」3.5%の理由は、「勉強に力をいれたいから」、「これから忙しくなるから」(中3生)というものであった。確かに、中学校から高校にあがるための受験勉強で忙しくなる子どもたちは多いだろう。受験期のスポーツ環境づくり、プログラムづくりはクラブにとっても重要なテーマになるのではないかと考える。

6. 他の習い事に関して

表6は、クラブの他にも習い事をしているかを尋ねた回答を示したものである。小6の「有る」が18.8%でどの学年よりも多く、また、クラブ加入の動機で「運動が好きだから」も多く、この

表5 クラブ継続の意志 (%)

学 年	継続中止	継続する
小3	0.0	2.4
小4	0.0	8.2
小5	0.0	10.6
小6	0.0	32.9
中1	0.0	16.5
中2	0.0	16.5
中3	3.5	9.4

n=85

表6 学年と他の習い事の有無 (%)

学 年	無 い	有 る
小3	1.2	1.2
小4	1.2	7.1
小5	3.5	7.1
小6	14.1	18.8
中1	11.8	4.7
中2	10.6	5.9
中3	10.6	2.4

n=85

学年の活動が多岐にわたっていることがうかがえる。先述したとおり、クラブをする子としない子の二極化も進んできている。昨今の子どもたちの生活スタイルを鑑みれば、クラブの中で他の習い事も合わせてできるような環境づくりも検討していくことが必要であろう。

7. 子どもがクラブに魅了される要因

表7は施設・人・お金に関する1～58項目までの質問をSPSSにより、主因子分析し、バリマックス回転を行った結果である。因子負荷量0.4未満のものを削除し因子分析を繰り返した結果、解釈可能な5つの因子が抽出された。1～5までの各因子の項目群の内容から、因子の意味について検討していく。

(1) 第一因子

第一因子は、V4「漫画や図書のコーナーがある」、V3「自動販売機が置いてある」、V6「運動するのに必要なトレーニング機器がそろっている」、V7「トレーニング機器は新しいと思う」という項目で施設の付帯設備に関することであり、「付帯設備に関する因子」と名付けた。

スポーツ以外にも図書コーナーなどの文化的な要素を取り入れることで、地域の人々が気軽に立ち寄って、スポーツ活動に積極的でない人でも、交流や親睦の図れる、開かれたクラブになる。また、スポーツをする環境として必要なトレーニング機器がそろい、新しさがあることで、施設的环境は充実してくるのである。スポーツ活動で、設備が整っているということは重要な要素である。日本体育・スポーツ経営学会(2002)によると、スポーツをする施設以外にも人が団欒できる場のような空間も必要な要素であるとしている。

(2) 第二因子

第二因子は、V35「コーチはスポーツが上手だ、すごいなあと思う」、V34「コーチは練習を細かく教えてくれる」、V30「クラブに入っている障害者と一緒にスポーツをしている」、V41「自分は不安や疲れを感じることもある」、V25「親戚もクラブに入っている」、V43「自分はスポーツが好きである」という項目であり、「コーチの資質に関する因子」と名付けた。

コーチに関する項目がでてきたが、指導者はスポーツも子どもも好きでなくてはならない。スポーツの指導に必要な知識・技術は勿論、子どもの発育・発達していく心やからだについての知識も身につけ活用していく努力が必要とされている。そういった指導者がクラブに存在すること

表7 SPSS Ver. 14 による分析の結果

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5
F1：付帯設備に関する因子					
V4 漫画や図書のコーナーがある	0.895593	-0.00735	0.194993	0.121995	0.033625
V3 ジドウハンバイキが置いてある	0.875258	0.156976	0.15514	-0.04043	0.068454
V6 運動するのに必要なトレーニング機器がそろっている	0.865007	0.15348	0.073895	0.036688	-0.04153
V7 トレーニング機器は新しいと思う	0.836043	-0.01564	-0.03537	0.104642	-0.02337
F2：コーチの資質に関する因子					
V35 コーチはスポーツが上手だ、すごいなあ、と思う	0.044785	0.74046	0.143145	0.183056	0.005082
V34 コーチは練習を細かく教えてくれる	0.06206	0.653882	-0.01897	-0.05646	-0.02934
V30 クラブに入っている障害者と一緒にスポーツをしている	0.164275	0.577058	0.005484	-0.00501	0.034805
V41 自分は不安や疲れを感じることもある	0.168092	0.563713	0.094944	0.103207	0.094794
V25 シンセキもクラブに入っている	0.043474	0.549191	0.129834	0.063861	0.05097
V43 自分は、スポーツが好きである	0.118206	0.528721	0.021616	-0.12479	0.039721
F3：クラブの仲間に関する因子					
V20 クラブで友達と会うのが楽しい	-0.02691	0.171426	0.715692	-0.01828	-0.10274
V27 クラブに入っているの大人たち（コーチ以外）とよく話をする	-0.01156	0.046952	0.689204	0.345715	0.206175
V28 クラブに入っている大人たちと一緒にスポーツをしている	-0.01092	0.363786	0.566936	0.181613	0.277373
V1 施設は使いやすいと感じる	0.267653	0.045443	0.529797	0.080653	0.028758
F4：自分自身の活動の成果に関する因子					
V33 コーチはよく「うまくできたね」とか、ほめてくれる	0.08501	0.044477	0.319226	0.877508	0.020901
V37 自分はクラブに入って体力がついたと思う	0.035959	0.112562	0.289164	0.777499	0.145319
V56 水や電気は大切に使っている	0.005373	0.093705	0.144262	0.425584	-0.07168
F5：自分自身の充足感に関する因子					
V39 自分にとってスポーツをする時間はちょうどいいと思う	-0.00478	0.22918	0.025128	0.043604	0.712166
V16 クラブで友達ができた	-0.06726	0.082601	0.004658	0.053956	0.637101
V40 自分はよくイライラすることがある	0.195551	0.04164	0.033113	0.121308	0.596765
V26 家族によくほめられる	-0.16648	-0.05351	0.101146	0.086901	0.535069

によって、子どもたちはもっと頑張ってスポーツを楽しみたいと願うであろう。また、指導者は細かく練習を教えることで、子どもとのコミュニケーションも円滑になり得る。Bクラブでは、指導者に問題があると、子どもの参加率が少ないと聞いた。それくらい、指導者は子どもにとって重要な存在である。

クラブの障害者への配慮についてBクラブでは、週に一時間の交流教室を設けている。Aクラブでは現在、障害者は参加しておらず、障害の状況によっては受け入れる用意があるという。クラブは、誰でもが参加できるものとして、Bクラブに交流教室があるように、他のクラブでも開設を検討してもらいたいと考える。総合型クラブは、障害者への配慮も怠ってはならない。

(3) 第三因子

第三因子は、V20「クラブで友達と会うのが楽しい」、V27「クラブに入っている（コーチ以外）の大人たちとよく話をする」、V28「クラブに入っている大人たちと一緒にスポーツをしている」、V1「施設は使いやすいと感じる」という項目であり、「クラブの仲間に関する因子」と名付けた。

子どもたちは、クラブに行けば友達や仲間がいるからつらい練習も一緒に頑張れたり、学年を問わず広く関わることができたりすることができる。また、世代の違った大人たちと関わることで世代間の交流が促進され、自分たちの知らない世界を知ることができる。大人や友達同士、初対面の人々にも挨拶をしたり、敬語を使ったりすることで社会性が身についていくものであろう。

最近では、地域内でのコミュニケーションの希薄化が進んでいる。しかし、クラブでは子どもたちが安心して大人たちと関わりあうことができ、さらに様々な人と関われる唯一の場である。子どもたちがいろいろな人と積極的に関わることで、地域のつながりは強くなり、危惧されている地域の防犯にも役立つのではなかろうか。

(4) 第四因子

第四因子は、V33「コーチはよく、上手くできたねとほめてくれる」、V37「自分はクラブに入って体力がついたと思う」、V56「水や電気は大切に使っている」という項目であり、「自分自身の活動の成果に関する因子」と名付けた。

子どもたちがクラブ加入した成果として、自分自身の体力が向上したり、技術が向上したりと実感できれば、自分自身の大きな自信につながることであろう。また、指導者や家族、仲間にも褒められ、認められることでも自信につながる。そういった場になるように、クラブ運営を手がけていかなければならない。

(5) 第五因子

第五因子は、V39「自分にとってスポーツをする時間はちょうどいいと思う」、V16「クラブで友達ができた」、V40「自分はよくイライラすることがある」、V26「家族によくほめられる」という項目で、自分自身の心を満たすことであり、「自分自身の充足感に関する因子」と名付けた。

子どもたちは、クラブに来ると学校以外の友達ができたり、クラブと一緒に通うことが一つの楽しみになったりもする。また、家庭や学校だけであった視野が外へと広がり、社会とのコミュニケーション能力も醸成されよう。明石（2004）によるデータで語る平成の子ども気質によると、友達とうまく交われない子がほぼ一割近くいるという。例えば、よくイライラする環境にある子どもは、スポーツをすること自体でそのイライラを発散させることができる可能もあるが、さらに、積極的にスポーツを通して人と関わり、そういった壁を取り除き、自分自身の充足感を高める必要がある。また、そういう場にクラブ運営者はしていかなければならない。

(6) お金に関して

ここでは、会費に関する因子を抽出することはできなかった。クラブによってクラブ自体が会費を徴収したりしなかったり、教室ごとに異なる会費を徴収したり、しなかったりであった。また、NPO法人を取得しているクラブもあればしていないクラブもある。さらに、スポーツ振興くじ（toto）を利用するクラブもあり、財源は様々である。

子どもにとって、会費についての質問は、解りづらいものであったかも知れない。しかし、子どもであってもクラブの会員であり、クラブの運営を支える当事者でもあるから、クラブ全体がどのように運営され、自分たちの支払った会費がどんな事業に活かされているのか等がある程度理解する必要がある。例えば、子どもたちが参加するイベント等を通して、バザーなどで儲かっ

たお金がクラブの運営にどのように利用されていくかなどを教えていくことも大切であろう。

IV. ま と め

本研究では2つのクラブの事例から、総合型地域スポーツクラブに子どもたちが魅了される理由について、施設・人・お金などの面から分析した。

因子分析による結果をみると、施設の付帯設備の充実が、スポーツ以外のことでも子どもにとっての魅力となっていた。

「コーチの資質に関する因子」や「クラブの仲間に関する因子」が抽出されたことで、様々な人との関わりも重要な魅力の要素であるということがわかった。

会費等については、顕著な因子を抽出することはできなかったが、子どもたちがバザーでモノを販売したりすることで、クラブの資金がどのように運営に使われているか理解することができ、子どもがイベントスタッフとして参加することもクラブに魅力を感じる一因になることがわかった。

今後、子どもたちにとって魅力として抽出された図書コーナーや談話コーナーなどの付帯設備以外にも、学校の宿題などができる「学習コーナー」をクラブハウスに設置することも重要ではないかと考える。スポーツ教室等がある日は、忙しくて宿題等の時間があまりとれない子どもがいるかもしれないが、そのような子どもたちを家族が迎えに来るまでの時間や、練習までの時間で余裕があるときに活用できるスペースがクラブハウスにあれば、保護者にとっても安心な空間になるのではないと思われる。そこでは上級生が勉強を教えてくれたり、友達同士でも勉強を教えあったりすることで、さらにクラブが地域の子どものための新たなコミュニケーションの場となる可能性がある。運動や・スポーツのみならず、子どもの日常生活をサポートできる快適な場のマネジメントの在り方を、クラブはさらに工夫していく必要があるだろう。

参 考 文 献

- 明石要一 (2004) データで語る平成の子ども気質. 学校の教育の改革シリーズ No. 5. 明治図書, pp. 24-25.
- 明石要一・川上敬二郎 (2005) 子どもの放課後改革がなぜ必要か. 学校の教育の改革シリーズ No. 6. 明治図書, pp. 160.
- 浅見俊雄・大槻文夫・村田光範共著 (1996) 子どもの健康とスポーツ. 医師薬出版株式会社.
- 学校週5日制 (2008) http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/index_b.htm
- 平成21年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査 (2009) http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/1246863.htm
- 日本体育・スポーツ経営学会 (2002) テキスト総合型地域スポーツクラブ. 大修館書店, pp. 125-126.
- 西島 央・中澤篤史 (2005) 中学校部活動の制度的変化と「活動参加状況」に関する教育社会学的考察——家庭の経済的背景に注目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要第45巻: pp. 64-66.
- 白井 楨・小木美代子・姥貝荘一 (1996) 子どもの地域生活と社会教育. 学文社
- 総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm
- 曾根幹子・折本浩一 (2007) 地域スポーツクラブの教育的効果に関する研究——子どものスポーツ活動と総合型地域スポーツクラブの有機的關係——. 児童教育研究, pp. 79-86.
- 曾根幹子, 折本浩一 (2008) 学校運動部活動と地域スポーツクラブの連携の在り方に関する研究——子どもの体力向上とスポーツ活動の促進に向けて——. 児童教育研究, pp. 81-88.
- 鳥越皓之 (2008) 「サザエさん」的コミュニティの法則. NHK 出版, p. 29.
- 財団法人日本体育協会 (2009) <http://www.japan-sports.or.jp/local/index.asp>

Summary

In Japan, There is a declining birthrate and society is aging progressively.

It is necessary to think about how not only to improve technique and physical fitness by the sports practice within Community Sports Clubs. Given the declining birthrate and aging phenomenon, regional sports clubs provide elderly people and children with places to integrate with others.

The purpose of this study is to explore the area resources and management of community sports clubs.

The research method is the investigation of children's consciousness.

The results are;

1. Additional and incidental facilities with regard to the equipment that sports facilities originally have been enhanced.
2. The attraction for children is to be able to use these resources.
3. Participating in events as a member of staff is also an attraction.

A future task is to examine the setting up of school "Study corners" which allow children spaces to do homework.

[2010. 10. 4 受理]